

『女童子往来』の『鉢かづき』

——近世前期お伽草子享受の一側面(一)——

山本 淳

はじめに

江戸中期頃に大坂の書肆、柏原屋波川清右衛門によって刊行された「祝言御伽文庫」二十三篇に『鉢かづき』¹があげられている。それを松本隆信氏の「増訂室町時代物語現存本簡明目録」²では、A系統三種およびB系統に分類して四十五本を掲げておられるように、その諸本は相当に多く、人気の高い物語であったことがわかる。

こうした『鉢かづき』諸本は、「簡明目録」以降も続々と紹介されている。また、諸本の系統分類に関しても、穂久邇文庫蔵絵巻本の紹介によって新しい分類案が提示されてもいる。

本稿では、「簡明目録」以降に発見された『鉢かづき』諸本の一つを取り上げてみたい。それは、近世期におけるお伽草子『鉢かづき』享受の一例として、『女童子往来』(正徳五年刊)という女子用往来物に合綴されている一本である。往来物を介して享受

されていくお伽草子については、例えば松原秀江氏³などによってすでに指摘されているが、あまり活況を呈しているとはいえない。そこで、『鉢かづき』という作品を取り上げ、本文・挿絵・柏原屋の出版活動についてみていくことで、往来物とお伽草子関係について検討を加えていきたい。

一 『女童子往来』の『鉢かづき』

ア、『鉢かづき』と往来物

平成十四年伝承文学研究会大会時に石川透氏は、近世期におけるお伽草子享受の在り方の一つに百人一首の板本に『鉢かづき』が頭書として合綴されている例を石川氏所蔵の二本の資料によって紹介された。お伽草子がそれ自体、一つの物語としてではなく、別の作品に収載されて享受される事例の一つに『鉢かづき』があることを示された。

その後、このような形態の『鉢かづき』諸本は石川氏所蔵本以

外にも存在することが分かってきた。ここではまず石川氏所蔵本の奥付を示し、次にその特徴をあげてみよう。

石川氏所蔵の二本は、両本とも表紙が欠けており表題が不明であるが奥付が残っており、それぞれ、享保十六年（一七三二）山口茂兵衛新刊本、天明六年（一七八六）武村嘉兵衛・林権兵衛・林伊兵衛・西村平八新刻本である。これらの主な特徴として、次の五点が指摘できよう。

- ① 女子用往来物（特に百人一首をメインにしたもの）の頭書に合綴されている。
- ② 題名は「鉢かづき物語 上（下）」、尾題が「はちかつき」。但し上下巻という明確な分け方はされていない。
- ③ 本文は渋川版御伽文庫本とほぼ共通。
- ④ 頭書のため横長の匡郭内に本文が収載。
- ⑤ 挿絵は全部で十一図、いずれも収載スペースの半分は本文。

イ、架蔵本の特徴

「百人一首」あるいは女子用往来物の世界で、こうしたお伽草子がいかに享受されてきたのか。往来物にお伽草子が合綴されている事例を調べていくうちに、「女童子往来」という女子用往来物にも「鉢かづき」が合綴されていることが確認された。

では、初めに架蔵「女童子往来」の簡単な書誌解題を示し、次にその特徴を指摘してみる。

○架蔵「女童子往来」

〔外題〕「百人一首」伊勢物語／三十六歌仙 女童子往来〔原題簽・表紙左上〕。

〔刊年〕正徳五年（一七一五）刊。〔蔵書印〕なし。

〔柱刻〕上巻「二十四 上一（十三）」・中巻「百人 中十四（四十三）」・下巻「伊勢 下四十四（八十）」

〔表紙〕藍色無地の原表紙。〔目録〕表紙中央に内容目録が貼付（原目録）。

〔装訂〕袋綴じ。〔料紙〕楮紙。

〔巻数〕三巻。〔数量〕一冊。〔丁数〕八〇丁。〔寸法〕縦二六×一八・五糎。

〔刊記〕「正徳五年乙未九月吉日、大坂 村井喜太郎、渋川清右衛門」。

〔備考〕挿絵の多くに後筆で稚拙な彩色が施されているが、欠損部もなく状態はよい。なお「往来物大系」に影印あり。

○架蔵「女童子往来」合綴「鉢かづき」

〔内題〕「はちかつき物語上（下）」（首題。但し下巻は「つ」と濁点が付される）

〔尾題〕「はちかつき 上下終」。〔目録題〕「鉢かづき物語（）」〔行数〕本文二三行、和歌一首二行。〔本文用字〕漢字・平仮名。

〔巻数〕二巻。〔丁数〕二五丁。上巻一三丁に相当、下巻一三

丁（但し上巻二三丁表に下巻二丁目の本文が入る）。

〔挿絵〕上巻・四図。下巻・四図。但し下巻第三図と第四図は配置が逆になっている。

この『鉢かづき』には、前項で示した女子用往来物『百人一首』合綴の『鉢かづき』と比較すると、非常に興味深い特徴が見られる。

それは、まず往来物の特徴である実用的な内容を持った構成は取らず、文学作品を中心に構成されている点である。

次に、最も重要な特徴として、版元の一人に渋川清右衛門の名がある点である。実は架蔵本の本文は、後に刊行される御伽文庫本系統ではなく、万治二年松会開板本の系統なのである。また、挿絵も石川本のような本文と挿絵が頭書の匡郭内に収まる体裁ではなく、頭書の匡郭内を一杯に使った横長のものであり、これは御伽文庫本（十一図）にほぼ共通のものである¹⁵。そこでこの架蔵本の大きな注目をまとめると、次のようになる。

① 渋川清右衛門は祝言御伽文庫二十三篇を世に出す以前に、既にお伽草子『鉢かづき』を出版している。

② 本文は江戸の松会開板本と共通であるが、挿絵は後の御伽文庫本と共通のものである。

以上のように、架蔵本は、他の『百人一首』合綴本と大きく異なる特徴を有していることが確認された。

これらの特徴は、御伽文庫本以前のお伽草子本文の在り方や出版者（特に柏原屋）の問題に大きな示唆を与えてくれるものである。こういった側面から『鉢かづき』をとらえた場合、どのようなことがいえるであろうか。

それでは次に具体的に本文異同の検討を行い、続けて挿絵について考察をし、最後に板元である渋川清右衛門など当時の出版状況の中の『鉢かづき』について述べてみたい。

二 松会板系統諸本との比較①本文異同

では、この架蔵本の本文にはいかなる特徴が見られるであろうか。まず本章では、架蔵本と松会板系統諸本との比較を行っていくことにする。

初めに現存する松会開板本系統諸本で最古の万治二年松会開板本との本文異同を行い、次に松会板系統諸本全体での異同を確認していくことにする。

ア、万治二年松会開板本との異同

架蔵本と万治二松会本の本文異同を検してみると、六一例を数えた。六一例の異同箇所を、上巻は[01]～[18]、下巻は[19]～[61]のように示した。また引用箇所は「」が松会板、『』が架蔵本を示す。また異同箇所が上巻一丁表にある場合は（上1オ）のように表示した。

異同の分布は、上巻が一八例であるのに対し、下巻が四三例と上巻に較べて下巻に異同箇所が集中していることが特徴として指摘できる。

また、異同を「a、架蔵本の増補」「b、架蔵本の欠字・欠文」「c、架蔵本の改変」と内容に分類してみるとそれぞれ、

a、一一例（上→二例・下→九例）

b、二三例（上→六例・下→一七例）

c、二七例（上→一〇例・下→一七例）

となる。cの用例が特に多いことから、架蔵本の本文は万治二松会本、あるいは同系統の本文を基に出版者である柏原屋が独自に改変を行ったと推定される。

では次に、具体的にどのような異同の特徴が見られるのか、例示しながらみていくことにする。但し、煩を避けるために特に重要な箇所のみを取り上げる。

a、架蔵本の増補

〈付属語を加える〉

[03]は、「こがれ」（上4オ）に「て」を加え「こがれて」（上4ウ）とする。架蔵本はここで改行されており、一文字加えて行末を整えたものか。[11]では「ゆどの、ひを」に「の」を付けて「ゆどの、の火を」とする。これは架蔵本では「ゆどの、」が行末にあたり次行冒頭に「の火を」とくるため、架蔵本が踊り字（、）を見落としたために生じたものと考えられる。[19]では「ながめけ

れば」（下1オ）に接頭語「打」を付け「打なめければ」（下1ウ）とする。[29]「しうとめ御せんへ」（下6ウ）に「の」を加えて「しうとめ御せんへの」（下8ウ）とする。[48]「にさせたまふ」（下10オ）に「よく」を付け「よくにさせ給ふ」（下13オ）とし、内容を強調する。

〈一文を加える〉

三例見られるが、いずれも文意を強める働きをしている。[20]では、「たしやうのえん」（下1ウ）に「是みな」を加え「是みなたしやうのえん」（下2オ→3ウ）とし、語句をより強調している。[31]では「ちぎり」（下6ウ）に「をなさば」を加え、「ちぎりをなさば」（下9オ）とする。[32]参照。[46]では、「わがせんぞ」（下10オ）に「さればとよ」を加え「さればとよわがせんぞ」（下13オ）とする。

〈一文字を加える〉

二例みられるが、どちらも架蔵本の誤りと考えられる。[27]では、「しうとごぜん」（下5ウ）に「め」を付け「しうとめごぜん」（下7ウ）にしている。『鉢かづき』では「しうと」は夫の父（舅）、山蔭三位中将のことである。ここは、三位中将が嫁比べに否定的な発言をする場面であり、また後に「しうと殿」とともに「しうとめ御せん」とあるため、架蔵本のように「しうとめ（姑）」とするのは誤りである。[47]では、「おそれながら」（下10オ）を

『お、それながら』（下13オ）と「（お）」を一文字増やしている。

b、架蔵本の省略

〔付属語の省略〕

架蔵本が付属語を省略している例であるが、省略しても意味は通じる。例えば[06]の「身をこそ」（上5オ）の「こそ」がなく係り結びをしない（上5ウ）が、意味は通じる。他にも[35]で「しらせざれば」（下7オ）の「せ」がない（下9オ）例があるが、これはない方が意味が分かりやすく、本文の誤りを修正していると考えられる。

〔敬語表現の省略〕

[10]では「はなれ候て」（上6ウ）の丁寧語「候」がない（上7ウ）、[36]では「見申候はん」（下7ウ）の丁寧語「申」がない（下9ウ）、[53]では「御事」（下10オ）の接頭語「御」がない（下13オ）、[59]では「なしまいらせ」（下10オ）の尊敬語「まいらせ」がない（下13ウ）、というように敬語表現の省略がみられる。

〔文章の欠落〕

比較的長文が架蔵本では欠落している例が三例みられる。[12]では「くるれば御あしのゆわかせやはちかづきとげちをする」（松・上7オ、架・上8オ）が、[23]では「はちかづきかくばかり／わがおもふ心のうちもわかへるいはまの水をみるにつけても／な

ど、うちながめ又はちかづきかくなん」（松・下3オ、架・下5オ）が、[37]では「はるとなつとはとなりなりあきはことさらきくのはな」（松・下7ウ、架・10オ）がそれぞれ欠落している。

〔語句の省略〕

[39]で「御きやくもじ」（下7ウ）の「もじ」がなく（下10オ）、女房言葉を使わない。[52]では「おもやせ」（下10オ）の「おも」がない（下13オ）。『やせ（給へども）』でも意味は通じるが、架蔵本は直前の語句「御としより（松会本）」が『御おもかげ』となっている（[51]参照）ため、「おも」の重複をさけたか。[56]では、「さればこそ」（下10オ）がない（下13ウ）が、[46]で「さればとよ」を加えたのと逆のことになっている。

c、架蔵本の改変

〔付属語に関する例①活用を変える〕

[01]の例であるが、「あひじ給ひける」（上1ウ）の末尾を「給ふ」（上1ウ）に替えており、興味深い。架蔵本は過去の助動詞「ける」を省略して「給ふ」となっているが、係助詞「ぞ」が直前にあるので両本とも連体形で結ばれており問題はない。但し架蔵本は、本文末で上巻一丁裏が終わっていることから、文字数制限のために「ける」を省略したとも考えられる。この他に二例みられるが、係り結びの法則に則している場合とそうでない場合の二通りである。

〈付属語に関する例②助詞を変えろ〉

[18]で「かくこそ」(上10ウ)を「かくぞ」(上12ウ)にしている。係助詞「ぞ」なら文末は「ける」が正しいが、架蔵本ではそのまま已然形(「けれ」)にしている。

〈類似の語句に替える〉

[54]では「はちかづきのひめにて候へとて御出ありければ」(下10オ)を「鉢かづきのひめ」よとの給へは」(下13ウ)にしており、父娘の再会という劇的な場面で鉢かづき姫の行動が省略されるように、ここでも語句を省略する傾向が窺える。他に、類似の語句に替える事によって内容に違いが生じてくる例もある。[28]では「思ひしられたり」(下6オ)の「し」を「や」(下8オ)に替えているが、「思ひ遣る」では意味が微妙に変わってくる。[42]では「あなたへしされとて」(下9ウ)の「しされとて」を「のけと」(下13オ)にしているためにより直接的な表現になっている。[45]では「おもひなく」(下10オ)が「おもひなけく」(下13オ)になることで、悲しみの度合いがより強調されている。[51]では「御としより」(下10オ)を「御おもかけ」(下13オ)になっており、父親の年齢より顔立ちに注目する内容になっている。[60]では、「すゑはんじやうにすませ給ふ」(下10オ)の「すませ」を「さかへ」(下13ウ)にしており、現世的な祝言性を強調した表現になっている。

〈敬語表現の改変〉

敬語表現は、省略される傾向がここでもみられる。[08]では「申ける」(上5ウ)が「い、ける」(上6ウ)となり、丁寧な言い方を止めている。[44]では、「かたはらに立より給ひ」(下10オ)を「かたはらへへのき」(下13オ)に改変されており、追い立てられた父が去りながら公達を見つめる内容に変更されている。[61]では「申つたへんべりける」(下10ウ)を「いひつたへり」(下13ウ)としており、丁寧語「申」「はんべり」を使用しない叙述になっている。

〈誤りに関する例①修正〉

これは二例みられる。[17]で「よりほひ」(上10オ)を「よそほひ」(上12オ)に、[25]で「ごんじやうに」(下5オ)の「ご」を「じ」(下6ウ)に、万治二年本の誤りを修正している。

〈誤りに関する例②架蔵本の誤字〉

[38]の嫁較べの場面で「御せんたち」(下7ウ)を「御きんたち(御公達)」(下9オ)とする架蔵本の誤字がみられる。この他にも上巻二箇所、下巻二箇所の誤字がある。

以上、万治二松会本との異同を確認してきた結果、特に板元の都合によって改編がなされていたと思われる異同が多いことが確認できた。語句の増補・省略・改変が下巻に集中しており、[01]の

ように版木の都合による本文の改変、[1]の改行により一文字余計に加えたと思われる事例がみられたり、逆に一文字加えてしまったことで誤ってしまった事例〔27〕・〔47〕がある。また、敬語表現の省略や女房言葉「もじ」を省くなど、文字数を切り詰めていくという意識が窺える。これらの事例から、出版者のリライイト（本文に手を入れる）が頻繁に行われていたことが理解される。

御伽文庫本系統諸本の異同とは異なり、松会開板本系統諸本の異同は、諸本毎の細かな異同が多く各諸本をグループ分けする指標となる特徴的な異同が少ないという特徴があるが、こうした特徴は架蔵本にも伺えるものである。

イ、松会開板本系統諸本との異同

次に、前項でみてきた主な異同個所は万治二松会本以外の同系統諸本（参考として御伽文庫本系統の主要版本六本を加えた）ではどのようになっているのか、松会系統諸本を中心としたその他の諸本を含めてみていくことにする。比較に用いた諸本とその略称は次の通り。

〔松会開板本系統・版本〕

山九ノ天理図書館綿屋文庫蔵寛文六年山本九左衛門刊本（二冊）、
松京ノ京都大学附属図書館蔵寛文頃刊行松会開板本（二冊）、延
四ノ香川大学附属図書館神原文庫蔵延宝四年刊本（二冊）、井筒
ノ大東急記念文庫蔵宝永七年井筒屋三右衛門刊本（二冊）、享保

ノ大谷女子大学蔵享保十二年刊本（二冊）

〔松会開板本系統・写本〕

岩奈ノ岩瀬文庫蔵奈良絵本（三冊、欠丁あり）、大奈ノ大阪女子
大学附属図書館蔵奈良絵本（三冊）、石奈ノ石川透氏蔵奈良絵本
（二冊）、石元ノ石川透氏蔵元奈良絵本（三冊）、稼堂ノ金沢市立
図書館稼堂文庫蔵写本（一冊）、弘化ノ静嘉堂文庫蔵弘化五年小
さわてつ書写本（二冊）

〔参考・御伽文庫本系統〕

丹緑ノ天理図書館蔵寛永頃本屋弥右衛門刊古活字丹緑本（二冊）、
寛整ノ赤木文庫蔵寛永頃刊整版本（二冊）、松京ノ京都大学附属
図書館蔵寛文頃刊本（二冊）、高橋ノ国会図書館蔵万治二年高橋
清兵衛本（二冊）、御伽ノ洪川版御伽文庫本（三冊）、宝永ノ天理
図書館蔵宝永二年和泉屋茂兵衛刊本（二冊）

a、語句の増補

（付属語を加える）

[19]の「とかやうにながめければ」に接頭語「打（うち）」をつける（下1ウ）用例は、岩奈・大奈・稼堂と、丹緑・寛整・御伽・宝永の御伽文庫本系統諸本にもみられるものであり、注目される。また、[29]の「しうとめ御ぜんへ」に「御ぜんへの」と助詞「の」を付ける（下8ウ）例も石奈以外は丹緑・寛整・高橋・御伽と御伽文庫本系統諸本にみられるものである。

（一文字を加える）

[47]の「おそれながら」に「、」をつけて「お、それ」（下じオ）とする例は、井筒・享保・嘉堂の三つである。

b、語句の省略

（付属語の省略）

[06]の「かはへ身をこそ」の「こそ」がない（上5ウ）例は松京・大奈、[35]の「しらせざれば」の「せ」がない（下9オ）例は延四・岩奈・大奈・石元・弘化、[41]の「かんとんを」の助詞「を」がない（下12ウ）例は享保・弘化である。

c、語句の改変

（類似の語句に替える）

[01]の「あひじ」給ひける」を「給ふ」（上1ウ）にしているものは松京、弘化。[45]の「おもひ」なく」を「なげく」（下13オ）としているものは、享保、弘化（但し、「事になげくぞよ」）。

（誤りの訂正）

[17]で「よりほひ」を「よそほひ」（上12オ）と訂正している諸本は、山九・井筒・享保以外全てである。また[25]の「ごんじやう」は「じんじやう」（下6ウ）としており、これは比較諸本全て共通しており、万治二年松会開板本のみ誤りである。

以上、共通する異同は弘化本が四例で最も多い（省略・改変それぞれ二例ずつ）。他に享保本（増補・省略・改変が一例ずつ）、大奈本（増補一例、省略二例）が目立つ程度である。しかしこれらの諸本は架蔵本以降に出版・書写されたものであるから、特に異同の特徴と考える必要はないと思われる。

ところが、一方で参考として加えた御伽文庫本系統諸本の中で、架蔵本と共通する異同が、[19]の丹緑・寛整・御伽・宝永、[29]の丹緑・寛整・高橋・御伽と存在することが注目される。わずかに二箇所のみであるが、架蔵本の本文が松会開板本系統と御伽文庫本系統の間で「ゆれ」を生じている、と考えることも可能なのではないか。あるいは、丹緑本として出版されて以来改編されずに古態を残してきた箇所とも考えられよう。

奈良絵本のように写本が多い御伽文庫本系統に較べて、写本より版本の諸本がはるかに多い松会開板本系統²³であるが、実は写本より版本の方が本文異同が甚だしい。それは、本章で見えたように出版者による改変が頻繁に行われてきたためであるといえよう。

ウ、まとめ

以上、本稿では『百人一首』型の女子用往来物『女童子往来』にお伽草子『鉢かづき』が合綴されていることを紹介し、他の『鉢かづき』諸本との本文異同を通していくつかの興味深い特徴を指摘してみた。それは、

①版元に柏原屋洪川清右衛門の名があり、正徳五年刊行であること。

②柏原屋の出版であるのに本文は万治二年刊松会開板本系統である(御伽文庫本系統ではない)こと。

③本文は万治二松会本に較べて省略などの改編が行われているが、一部御伽文庫本系統と共通する異同もみられることである。

これらのことから、柏原屋の手元には、後の御伽文庫本となる系統の『鉢かづき』と共に万治二松会本と同系統の『鉢かづき』があり、まず松会開板本系統を板行したことが確認されよう。少なくとも架蔵本と同系統の本文が正徳五年時にはすでに上方に存在し、『鉢かづき』としての版行ではないが、『百人一首』に合綴された形で流通していたのである。これは、御伽文庫本系統本も松会開板系統本も、元々は上方で版行されたものという横山重氏の想定を間接的に裏づけるものであろう。

注

(1) 本稿では、中世から近世にかけて成立したいわゆる室町物語の総称として「お伽草子」を用いる。

(2) 奈良絵本国際会議編『御伽草子の世界』(昭和五七、三省堂)所収。以下「簡明目録」と略す。

(3) 例えば、新出諸本として奈良絵本・絵巻国際会議(平成十六年八月二九日)において小林健二氏が穂久邇文庫

蔵絵巻二軸を紹介された。

(4) 小林氏注(3)。他に福田晃氏の伝承文学研究会関西例会(平成一六年六月二十日発表、『鉢かづき』諸本の研究)、於立命館大学末川記念会館)など。なお福田氏は同発表において、穂久邇文庫本を最古態とし、御巫本、旧清水本などを含めて一類本、慶応義塾図書館蔵写本以下の洪川版御伽文庫本、万治二年松会開板本などを含めて二類本と分類された。

(5) 内題では『鉢かづき物語』。

(6) 松原氏「江戸時代における女性の文学的教養について」(同氏『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』(平成九、和泉書院)収載)。

(7) 紙数の関係上、今回は本文の検討のみを行う。

(8) 『鉢かづき』享受の一側面』として八月二五日に発表。於小樽商科大学。

(9) ここでは特に『百人一首』を中心とした女子用往来物をさす。

(10) 例えば、吉海直人氏蔵の四本がある(小林健二氏のご指示による)。

(11) 小泉吉永氏編集・吉海直人氏校訂『女子用往来刊本総目録』(平成八、大空社)によれば、天明六年新刻本は『藻塩百人一首千尋海』と比定出来るが、享保十六年本は不明。

- (12) 以下、御伽文庫本とし、同本を含む「簡明目録」A系統(一)口の諸本を御伽文庫本系統とする。
- (13) 『補訂版 国書総目録』には「女童子往来おんなごうちせきぐわい」一冊(類) 往来物 (成) 正徳五刊 (版) 日比谷加賀」とある。
- (14) 本稿では架蔵『女童子往来』(平成十五年十一月二日古書市にて購入)を用いる。以下架蔵『女童子往来』に合綴されている『鉢かづき』は架蔵本とする。なお石川松太郎氏監修『往来物大系』第九三巻・第四期「女子用往来」(平成六、大空社)に謙堂文庫蔵本が影印で収載されている。
- (15) 但し収載されている謙堂文庫本は完全なものではない。また、石川松太郎氏監修『往来物解題辞典解題編』(平成十三、大空社)に「女童子往来」で立項、『同図版編』(同前)に講堂文庫蔵本と思われる図版が一葉掲載されている。
- (16) これに関して詳しい考察は次稿で行う。
- (17) 本文の検討は次章で、挿絵については次稿で考察する。
- (18) 柏原屋洪川清右衛門の出版活動については、次稿で考察する。
- (19) 筑波大学附属図書館蔵本。以下万治二松会本とし、同本と共通の本文をもつ諸本(「簡明目録」A系統(二)一(ハ)を松会板系統諸本とする)。
- (20) あるいは版元側が、本文に独自性を出そうという意識があつた可能性もある。
- (21) 御伽文庫本系統諸本については、伝承文学研究会大会(平成十四年八月二十五日、於小樽商科大学)において指標となる語句の判別による分類が可能であると指摘した。
- (22) 松会板系統諸本の異同については、伝承文学研究会関西例会(平成十六年二月二三日、於立命館大学末川記念会館)において報告した。
- (23) 注(2)参照。
- (24) 逆に当該本の挿絵は御伽文庫本と酷似する。
- (25) 横山氏は『室町時代物語集』三(昭和三七、井上書房)所収、解題「附はちかづき草子の諸本」の「万治二年松会開板本」の項で、万治二年松会板はそれ以前の上方版を復刻したものではないか、と想定されている。もっとも、架蔵本の版行された時期を考えれば、柏原屋が江戸から万治二年本を直接取り寄せて参照したとも考えられる。

〔付記〕

※本稿は、伝承文学研究会関西例会(平成一六年二月二十一日、於立命館大末川記念会館)での報告の一部をまとめたものである。席上、ご教示を賜った諸先生方に深くお礼申し上げます。

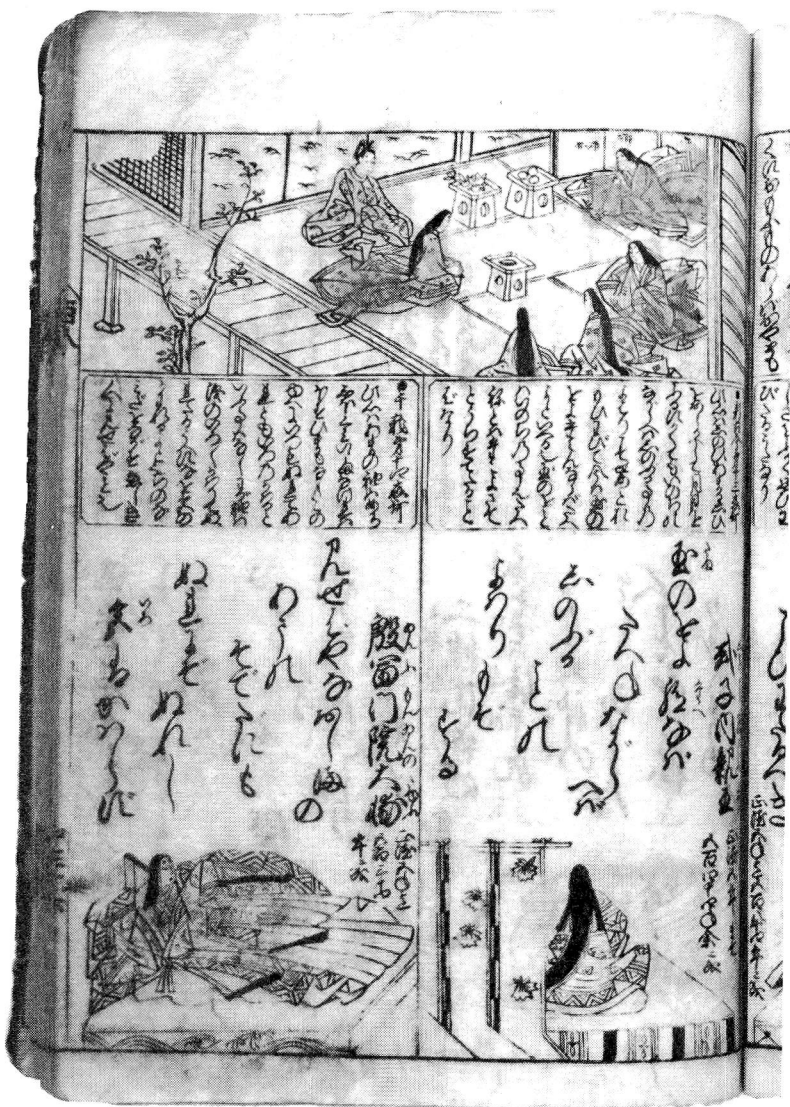
※また、貴重な所蔵資料を閲覧させて頂いた各機関に深謝いたします。

※なお稿者は平成十二年度より『寝屋川市史・鉢かづき編』の調査員を勤めており、その編纂過程でも多くの諸本を知見できたことを併せて記しておく。

(やまもと・じゅん 本学非常勤講師)



図一 「鉢かつぎ物語」冒頭（上巻一丁表）



図二「鉢かづき物語」第十一図（下巻十一丁表）